

人類の宇宙への挑戦を、映像で表現

光るニューロン

2008年9月11日「光るニューロン」が行われた。

宇宙放射線の影響によりCCDに白傷のついたハイビジョンカメラを使って、過酷な宇宙環境と、挑戦し続ける人間の叡智を映像で表現しようという試みだ。代表提案者である野村仁(名誉教授)に話を聞いた。

「宇宙で目をつぶっている時に光を見た」

宇宙飛行士のこのひと言が芸術家、野村仁氏の創作の原動力となった。宇宙で眠る時、目を閉じたにも関わらず、光が見えることは複数の宇宙飛行士から報告されている。宇宙に降り注ぐ放射線が網膜または視神経にあたって見える光だと考えられている。「美術家は目から入ってくる情報について考え作品を作ってきました。『見る』ということの根本を再考させられます」と野村氏はその衝撃を語る。

その後、2002年に米国テキサス州ヒューストンを訪れ、日本人宇宙飛行士たちと会って、直接体験談を聞く機会を得た。「印象深かったのは、ぼくが、放射線が『アタックする』と言った折りに向井千秋宇宙飛行士からは『ヒットする』という言葉が返ってきたこ

とです。つまり、放射線は何かを狙っているわけではなくて、宇宙空間に遍く存在していて、たまたま、視神経(ニューロン)に当たったことが報告されたのですね」

例えば、国際宇宙ステーションにあるハイビジョンカメラは長期間使っているうちに、画面にたくさん白い点が見えてくる(画像参照)。これはカメラの中のCCD撮像素子に宇宙放射線がヒットしていることの証拠だ。映像を撮る側にとつては、この白点は邪魔なもの。だが視点を変えれば宇宙放射線の痕跡であり、いかに宇宙空間に放射線が降り注いでいるかという状況を報告するにはうってつけの材料とも言える。

宇宙放射線には太陽から降り注ぐ放射線や、遠い銀河から太陽系の外から飛来する銀河放射線など様々な種類があり、宇宙飛行士が長期滞在する場合には、放射線防護などの対策を考えなければならぬ。一方、地球では大気や地球磁場に守られて、一次宇宙放射線が地表まで達することは少なく、森羅万象が循環する過程で生命も進化してきた。今、地上には四季折々、多種多様な生物が溢れ命を謳歌している。一方で宇宙は、野村氏に言わせれば「生命不足」だ。「宇宙飛行士の方との面談で、ミール宇宙船の中でゴキブリが出



野村仁
NOMURA Hitoshi
現代芸術家。京都市立芸術大学名誉教授。同大学とJAXA(当時宇宙開発事業団)の共同研究「宇宙への芸術的アプローチ」のメンバーを務めた。ISSの文化・人文社会科学利用パイロットミッションでは「ISS宇宙飛行士の'moon' score」と「光るニューロン」の2テーマの代表提案者。現在、カメラや三脚など7.5kgの機材を携えて、地上の生命を追いかけけている。動物を含めるかは検討中だ

た話を聞きました。地上だったらゴキブリは嫌われてすぐに排除しますよね。でも宇宙では、同じ地球の生命体とみなされたわけですから、『生命不足』の環境だったからでしょうね。ところが地上から交替の宇宙飛行士が到着しゴキブリを見た時にパシッと(笑)。宇宙と地上とは生き物に関して異なる感覚を抱かざるを得ないんだと思います」

野村氏は「生命溢れる地球」と「生命不足の宇宙」とを対比しつつ、放射線という厳しい環境を克服し挑戦を続ける人類の宇宙への営みを、映像で表現しようとしている。

宇宙で使った白傷つきカメラで地上の生命を撮る

作品は宇宙で撮影した映像と、地上で野村氏が撮影中の映像から構成される予定だ。

宇宙の映像は、NASAのグレ

ゴリー・シャミトフ飛行士に依頼した。「きぼう」日本実験棟内や「きぼう」の窓から見える地球の様子を、08年9月にハイビジョンカメラで撮影。一方、野村氏は宇宙で使われ、放射線によって撮像素子に白傷がついたハイビジョンカメラを用いて、10年春頃から地上での撮影を始めている。今、こだわっているのは植物だという。

「生命の進化において、動物よりも先に水中から陸にあがったのは植物です。浅瀬の藻が上陸を果たすには、最初の陸上植物から、四季折々の光景を生み出す多様な種が繁茂するのと同様の、想像を超える遙かな時間が必要でした」

人類が宇宙に行く今の状況は、水中から陸に生命があがった時と同じような進化の過程と言えるのだろうか。そんな問いも含めながら、野村氏は植物が地上に上がった約4億年前からの進化の歴史を映像にできないか、模索を続けている。